

大学基準協会による 第3期認証評価の変更ポイント

内部質保証の実質化に向けて

工藤 潤 大学基準協会事務局長 大学評価・研究部長

大学基準協会(以下、「本協会」という)は、2011年度からの第2期認証評価から、内部質保証を重視する評価システムを導入した。また、併せてこの内部質保証システムを構築する上で重要な要素となる3つの方針(学位授与方針、教育課程の編成・実施方針、学生の受け入れ方針)等の明確化について大学に求めた。

しかしながら、2011～2015年度の5年間の評価結果から、この内部質保証に何らかの問題点(努力課題または改善勧告)を指摘された大学は、受審大学の約3割強、また、3つの方針の明確化、特に、学位授与方針に学習成果の明示が

ない、または不十分として問題点(努力課題)を指摘された大学は、受審大学の5割強となった。

第3期認証評価の改革方向

①内部質保証の一層の重視

上記課題に対応して、第3期では、内部質保証システムを有効に機能させて、そのシステムが恒常的・継続的なプロセスとして学内に定着しているかなど、内部質保証の実質化を一層重視する評価へシフトすることとなった。

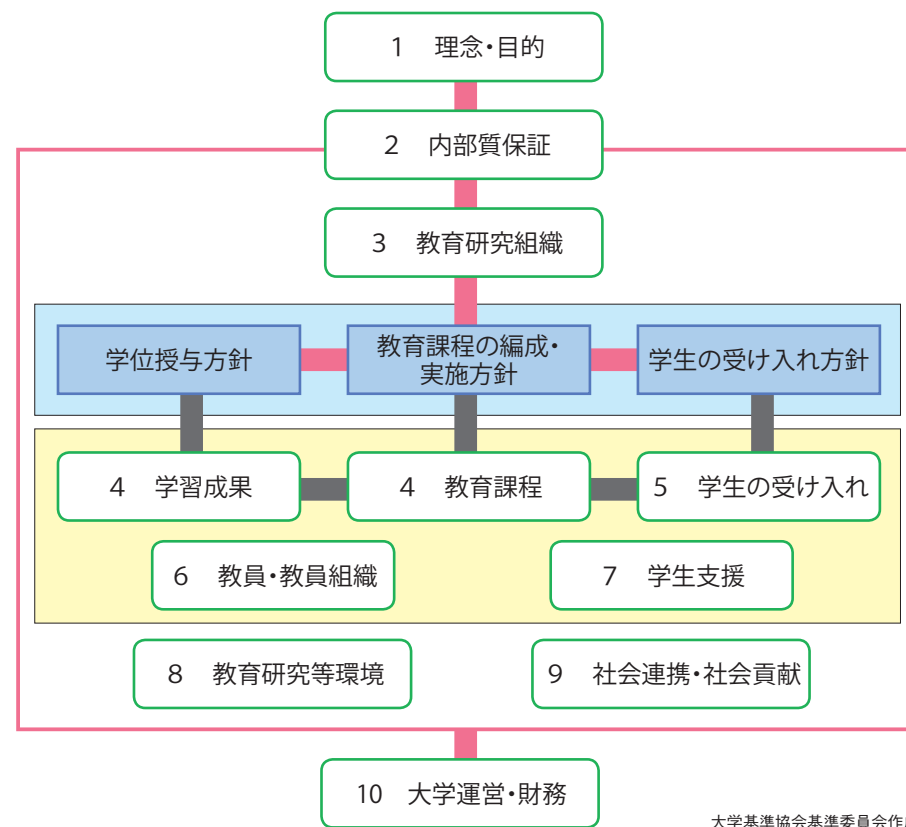
②教育のPDCAの重視

内部質保証の起点となる3つの方針を一体的に明確化し、こうした方針に則した学位プログラムを体系的に編成することが内部質保証の基盤となることを前提に、学位プログラムの適切な運用、教育プロセスや学習成果の検証、その検証結果を活用した学位プログラムの改善・向上の状況を重視することとした。

③教学マネジメントの重視

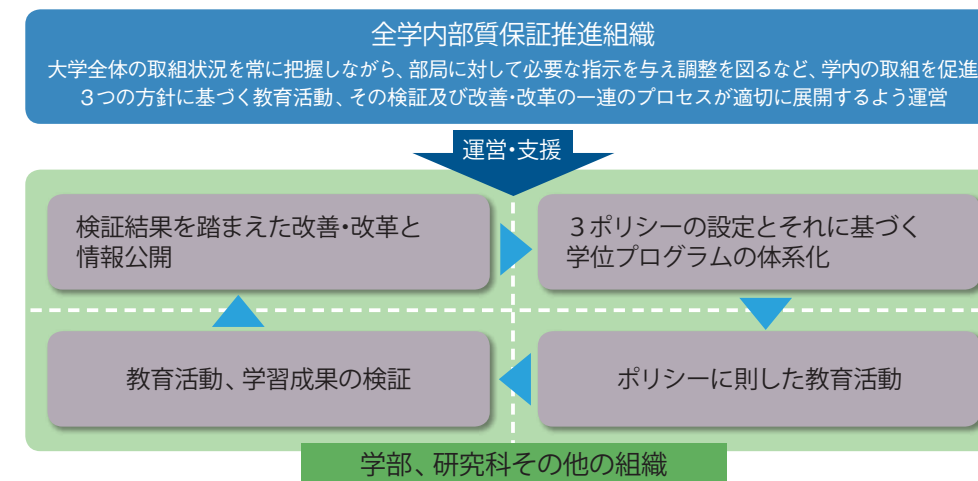
内部質保証は、各学部等における教育のPDCAを基本としつつも、それを全学的に運営・支援していく体制が極めて重要である。そのためには、執行部が中心となった全学的教学マネジメント体制を構築し、適切に展開していくことが求められ、こうした点を評価

図1 新大学基準の構造(第3期認証評価基準)



大学基準協会基準委員会作成

図2 内部質保証の仕組み(例)



で重視することとした。

内部質保証のあり方

次に、第3期認証評価の改革の中心をなす内部質保証のあり方について見ていきたい。

①大学基準における位置づけ

第2期における大学基準では、「内部質保証」を基準10に位置づけていたが、第3期の新大学基準では、内部質保証を基準2に位置づけてその重要性をより強調した。

②内部質保証の定義

内部質保証について、「PDCAサイクル等を適切に機能させることによって、質の向上を図り、教育・学習等が適切な水準にあることを大学自らの責任で説明・証明していく学内の恒常的・継続的なプロセス」と大学基準上、定義した。

③内部質保証の構築

内部質保証の構築に当たり、まずその推進に責任を負う全学的組織(以下、「全学推進組織」という)の整備及び内部質保証のための全学的な方針と手続きの策定が必要である。全学推進組織の役割としては、各学部等のPDCAが適切に展開されるよう、必要な運営等を行うことである。ただ、3つの方針に基づく教育を実施する主体は学部等であることに鑑みれば、全学推進組織は、学部等の自主性を尊重しつつ、学部等が大学の理念・目的に則した教育活動が展開できるようマネジメントしていくことが必要である。

また、内部質保証の全学的方針・手続きとして、内部質保

証に関する大学の基本的な考え方、全学推進組織の権限と役割、全学推進組織と学部等との役割分担、教育のPDCAのため枠組みを定めることが必要である。

④教育活動の検証

学部等は、定期的に自らの教育プログラムについて検証しなければならない。その際、単に学内関係者だけで検証するだけでなく、

客観性・妥当性を高めるために、そこに学外関係者の目を入れることも重要である。また、こうした検証結果を、明確な行動計画を伴った教育の改善・改革に連動させる必要がある。

⑤内部質保証システム自体の検証

各学部等のPDCAが有効に機能するための全学推進組織の支援・運営状況、その効果と課題等についても検証が必要である。

第3期認証評価における自己点検・評価の実施方法

第3期認証評価から本協会は、全学的観点からの自己点検・評価を求めることとした。具体的には、各学部等の教育プログラムの自己点検・評価の実施を前提に、学部等の教育活動を執行部がどのように捉え、改善に関与しているかを評価するものである。

今後に向けて

第3期認証評価から内部質保証をより一層重視することとしたが、内部質保証の究極の目的は、学生の学びの成長である。内部質保証システムは、認証評価を受けるために構築するのではなく、この目的の実現の手段であることを理解しなければならない。

本協会は、各大学の学生の学びの成長に、評価を通じて少しでも貢献できればと考えている。